

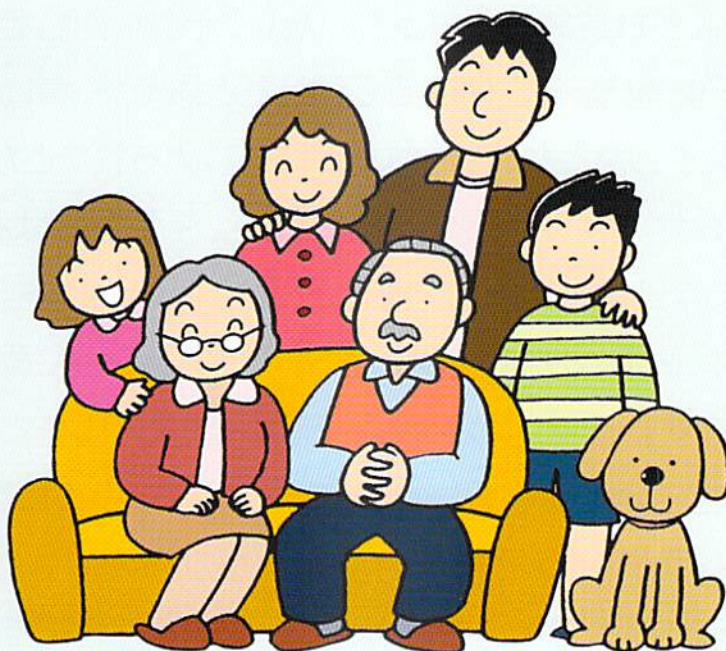
あか
明るいまちづくりをめざして

みんなで一緒に考えよう

第32回全国中学生人権作文コンテスト
法務大臣賞受賞作品

「リスペクトアザース」

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催



31号

新宮市教育委員会
新宮市人権尊重委員会

「リスペクト アザース」

僕は、日本人の両親を持ちながら、アメリカのサンディエゴで生まれて、十歳半まで生活し、地元のデイケア（保育園）、プレスクール（幼稚園）、小学校に通った。その中で出会った先生たちが何度も口にした『respect others（リスペクト アザース）』という言葉は、今も僕の行動や考え方に大きな影響を与えている。

サンディエゴは、ロサンゼルスみなみの南にあり、メキシコの国境から一時間程度だったので、土地柄のせいか、クラスには、肌の色も髪の毛の色も本当にいろいろな人種の人じんしゅがいた。僕が物心ついたときには、周囲にいろいろな人種の人たちがいるのが当たり前の状況だったので、自分がまわりの人と違っていても当然だと思っていたし、それに対して深く考えることもなかったように思う。どこの国でも同じだと思うが、集団生活が始まると、誰かが意地悪をしたとか、誰かが誰かにいじめられたとか、いわゆる人間関係のトラブルが起きてくる。そんなとき、先生たちは必ず『リスペクト アザース』いと言い、当事者に反省を促した。『リスペクト』の意味もはっきりわからない保育園や幼稚園の頃から、ことあるごとに繰り返し叩き込まれた。日本語にすると、「他の人のことを尊重しなさい」というような意味なのだが、今思うと「意地悪しないで、みんな仲良くしなさい」とか、「いじめはダメ」というそのときの行動を注意するのではなく、その行動を起こしてしまった根本の考え方を問題にしていることになる。

また、この言葉は僕が入っていたリトルリーグの監督やコーチもよく使っていた。選抜テストがない地元のリトルリーグでは、上手

い選手と上手くない選手が混合して十二人でチームとして試合に臨まなくてははいけなかった。上手くない選手がフライをポロリと捕りそこなったとき、チーム全体が「おい、この下手くそ」と怒鳴りたくなる場面で、監督やコーチは『リス



ペクト アザース』と言^いった。やる^き気がなくてエラーをするのはも^{ほか}つての他であるが、やる^き気があっても上^う手くできない選^{せん}手はいるのである。この場^ば合は、そこをわ^いかってやれとい^おう意味だと思^しっている。実^じ際、当^{とう}時初^じ心者^{しんしゃ}だ^たった僕は、この言^{こと}葉^ばを聞^きいて救^{すく}われる気^き持^もちにな^うり、も^うつと上^う手く^まなるよう^{よう}にう^{がん}ん^ばと頑^{さい}張^ごり、シ^{すこ}ーズン^{こう}最^{けん}後^{けん}にはチ^{すこ}ーム^{こう}に少^{けん}しは貢^{けん}献^{けん}でき^{けん}るよう^{よう}にな^{けん}った。

その後^ご、僕^{ぼく}は日^に本^{ほん}の小^{しょう}学^{がく}校^{こう}に通^{かよ}い始^{はじ}めた。周^{しゅう}囲^いの^{しゅう}み^いん^いな^いの^{せい}お^{かつ}か^がで生^{せい}活^{かつ}には^なす^{どう}ぐ^じに慣^おれた^なが、同^{どう}時^じに大^{だい}き^なカ^{カル}ル^{チャー}シ^{ョク}ョク^も受^うけ^いた。一^{いち}番^{ばん}驚^{おどろ}いた^{こと}は、み^{ほか}ん^{ひと}な^が他^おの^ち人^がと大^おき^く違^{ちが}わ^ない^{よう}に、な^おる^べく同^おじ^{よう}に^なる^{よう}に非^ひ常^{じょう}に^き気^{つか}を^み遣^たっ^{にん}て^いる^{よう}に^たに^ん見^たえ^たこ^{にん}と^であ^る。他^た人^{にん}よ^りう^まく^くい^かな^いか^ら目^め立^だた^{ない}よう^にに^して^いる^ので^はな^く、他^た人^{にん}よ^りう^まく^くで^きて^も目^め立^だた^{ない}よう^にに^して^いる^{よう}に^{かん}じ^た。僕^{ぼく}は最^{さい}初^{しよ}の^{うち}、そ^のノ^リが^わか^らず^いま^でど^おり、自^じ分^{ぶん}が^うま^く出^で来^きた^こと^を周^{まわ}り^の人^{ひと}に^つた^えて^いたら、「そ^れは^じ自^{まん}だ^い」と^いわ^れて、な^んと^も悲^{かな}しい^き気^も持^ちにな^なった。ま^た、友^{とも}達^{だち}同^{どう}士^しで^あい^て相^き手^もの^ぜ気^{たい}持^いち^にな^なれ^ば絶^ぜ対^{たい}言^いえ^ない^{よう}な^ふ侮^{じやく}辱^くする^{よう}な^なひ^どい^{こと}言^{こと}葉^ばを^いい^あ合^あっ^てい^ても、『冗^{じょう}談^{だん}』と^いっ^てう^やむ^やに^して^いる^こと^にも^{おどろ}驚^{おどろ}いた。僕^{ぼく}が^{よく}わ^から^ない^せ世^{かい}界^{かい}だ^たった。僕^{ぼく}が^叩き^{たた}込^こま^れて^いた『リ^スペ^{クト} ア^ザース』の^せ世^{かい}界^{かい}は^ここ^には^なか^った。

僕^{ぼく}の^かぎ^られた^{けい}経^{けん}験^{けん}の^はな^し話^わにな^るが、ア^メリ^カ (サ^ンディ^エゴ) で^はな^ぜそ^んな^に『リ^スペ^{クト} ア^ザース』を^こ子^こど^もの^た頃^{ころ}か^ら叩^{たた}き^{こん}で^いる^のだ^らう^か。

そ^れは、ア^メリ^カ社^{かい}会^{かい}が^{さい}つい^{きん}最^{じん}近^{しゆ}ま^さで^さひ^{べつ}ど^い人^お種^な差^さ別^{べつ}な^どを^おこ^なな^に行^おっ^てき^たこ^のの^{はん}反^{せい}省^{せい}か^らか^もし^れな^い。居^き住^{じゅう}地^ち区^くを^{せい}制^{げん}限^{げん}し^{たり}、公^{こう}園^{えん}や^ばス^なの^のの^{こう}公^{きょう}共^{きょう}の^ば場^ばで^も座^{すわ}る^ば所^{しょ}を^わけ^てい^{たり}と、差^さ別^{べつ}する^こと^が当^あた^り前^{まえ}で、一^{いっ}般^{ぱん}人^{じん}が^さ差^{べつ}別^{べつ}し^{たり}さ^れたり^する^こと^に何^{なん}の^ぎ疑^{もん}問^{もん}を^もた^ずに^し時^じ代^{だい}が^{なが}流^かれ^てい^た過^か去^こが^ある。そ^{んな}あ^やま^ま過^かち^くを^かえ^かえ^かえ^かこれ^こから^こ先^{たち}に^た繰^たり^こ返^こさ^{ない}よう^に、子^こども^{たち}達^{たち}に^叩き^{こん}で^いたり、



またそうすることによって、大人も自分自身を戒めているのかもしれない。

僕は日本でももっと、『リスペクト アザース』が浸透していけばいいと思う。日本は表面上差別のない社会なので、必要ないと思われるかもしれない。しかし、これこそが人権を考える上での基本だと思う。人権尊重の社会を作っていくのは、僕たちひとりひとりの考え方によるからだ。同じ人間は一人もいない。人と違っていることがまたその人の個性である。違う点だけでなく、うまくいったこと、できなくても努力していくことなどを尊重し合っていくことができれば、もっと素晴らしい社会になっていくと思う。

この作文は、第32回全国中学生人権作文コンテストで法務大臣賞を受賞した、神奈川県・鎌倉市立御成中学校三年 坪井 洸さんの作品です。坪井さんはアメリカで生まれ、10歳半まで生活し、その後、日本の小学校に通い始める。周囲のみんなのおかげで生活にはすぐに慣れたが、同時に大きなカルチャーショックを受ける。「リスペクト アザース」（他者を尊敬しよう）がそこにはなかった、違いを認めようとしないう意識に一番驚いたと述べています。

ご一読いただき、家庭、学校、職場、地域等で話し合っていいただければ大変ありがたく思います。

(資料) 法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会「人権作文集」

※ 作文内容は、原文をそのまま掲載しています。

ひろ ころも
広げよう やさしい心と思いやり